イーディス・ウォートンの旅行記 In Morocco：オリエンタリズムとフェミニズムのまなざし

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪樟蔭女子大学 公開日: 2022-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水口, 陽子 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4796

イーディス・ウォートンの旅行記 *In Morocco*
―オリエンタリズムとフェミニズムのまなざし―

学芸学部　国際英語学科　水口　陽子

要旨：5 歳から 21 歳の間にヨーロッパを頻繁に行き来し、その間 8 年を外国で過ごした Edith Wharton（イーディス・ウォートン）は、ヨーロッパのアート、建築、マナー（作法）に精通し、数多くのノンフィクション作品を出版している。1907 年から 1910 年にかけてフランスに完全に拠点を移してからは、母国アメリカを鋭い視点で捉え直し、代表作 *The Age of Innocence*（1920）や *The Custom of the Country*（1913）などにおいても、アメリカとヨーロッパの価値観の違いに対する考察が色濃く現れている。ヨーロッパ文化に精通し、とりわけフランスやイタリアに関する言及が多いウォートンの作品群の中でも、*In Morocco*（『モロッコにて』1920）という著作はウォートンにとって異色のテーマを扱った旅行記であると言える。ウォートンの旅行記は、アートや建築への言及だけでなく、文化、生活様式、マナーなど多岐にわたる様々な要素を含んだ読み物となっている。旅行記を中心としたノンフィクション作品の中に、常に移動を伴う人生を送ったウォートンにとっての移動と旅の意味を探りながら、ウォートンの自伝や旅行記などノンフィクション作品にしばしば現れるフィクション性という問題についても考察する。

キーワード：イーディス・ウォートン、『モロッコにて』、旅行記、移動と旅、オリエンタリズム、フェミニズム

1. 始めに

5 歳（本人による自伝の中では 4 歳と記されているのだが）から 21 歳の 16 年の間にヨーロッパを頻繁に行き来し、その間 8 年を外国で過ごした Edith Wharton（イーディス・ウォートン（1862–1937））は、ヨーロッパのアート、建築、マナーに精通し、数多くのノンフィクション作品を出版している。1907 年から 1910 年にかけて徐々に、フランスに完全に拠点を移してからは、母国アメリカを鋭い視点で捉え直し作品の中で時に辛辣に描いている。代表作でもあり、傑作とされる *The Age of Innocence*（『エイジ・オブ・イノセンス（無垢の時代）』1920）の中では、Elen Olenska というヒロインがヨーロッパの気品を伴ってアメリカに現れ、最終的にパリに戻る。中西部からニューヨークに上京し、アメリカ社交界に潜り込み、のちにはヨーロッパ貴族との結婚まで行き着く主人公 Undine の繰り返される結婚による出世を描く *The Custom of the Country*（『お国の風習』1913）、そして遺作であり、死後出版となった作品、*The Bucaneers*（『ヴァッカニアーズ』1938）では、アメリカ娘たちがイギリスの貴族と結婚するなどの作品においても、アメリカとヨーロッパの価値観の違いに対する考察が色濃く現れている。

ヨーロッパ文化に精通し、中でもフランスやイタリアに関する言及が多いウォートンの作品群の中で、*In Morocco*（『モロッコにて』1920）は異色のテーマを扱った旅行記であると言える。ウォートンの旅行記は、アートや建築への言及だけでなく、文化、生活様式、マナーなど多岐にわたる様々な要素を含んだハイブリッドな読み物となっている。

In Morocco を読み解くことで、常に移動を伴う人生を送ったウォートンにとっての移動と旅の意味を、旅行記作品の中に見出しながら、フィクション作品との関わり、さらには、ウォートンの自伝や旅行記などノンフィクション作品にしばしば現れるフィクション的要素についても考察する。

2. ウォートンによる旅行記群

イーディス・ウォートンは 1962 年に生まれてから、生涯ほぼ絶え間なく旅をしていたと言っても過言ではない。まず、ウォートンによる旅行記というジャンルについて確認する。

ウォートンによる著書は、20 冊余りの長編、中編小説の他に短編集、またノンフィクション作品が 10 冊以上出版されているが、それらの内どの作品を旅行記とみなすかということが問題がとなってきた。*A Motor-Flight Through France*（1908）の序文（Introduction）

を書いているMary Suzanne Shriberは、*Italian Backgrounds, A Motor-Flight, In Morocco*の3作品を旅行記としており（Intro xviii）、それが一般的なウォートンによる旅行記作品とみなされている。それに対し、1997年に*Edith Wharton's Travel Writing: The Making of A Connoisseur*の著書で初めて本格的なウォートンの旅行記研究を著したSarah Bird Wrightは、より幅広い8作品をウォートンによるTravel Writingと捉え分析を試みている。

末尾に掲載した【表1】は、その分類を表にしたものであるが、実際の旅行を元にしたもの（Bird 113）が4作品で、そのうち、一番上の*The Cruise of the Vanadis*（1992）は、実際に出版されたものではなく、1888年（26歳）の旅行についての日記（1991年に発見、1992年に出版）であり、続いて、主に第一次大戦戦時下のパリでの経験と前線への訪問についての*Fighting France, from Dunkerque to Belfort*（1915）。次の*A Motor-Flight Through France*（1908）は1906年5月，1907年3月（ヘンリー・ジェイムズと）の3度の旅行が元になっている。1906, 1907, 1908年に*Atlantic Monthly*に掲載され、そのタイトル通り、車での旅がテーマとなった旅行記である。*In Morocco*（1920）はウォートンの最後の旅行記であり、1917年にモロッコを訪れた時の経験を元にしている。

それに対し、ウォートンによる旅行記という場合には、一般的にMary Suzanne Schriberが*A Moter-Flight Through France*の序文（イントロダクション）で述べている通り、*Italian Backgrounds, A Motor-Flight Through France, In Morocco*の3作品であるとみなされている。

3. *In Morocco*の旅行記としての特徴

まず、ウォートンの最後の旅行記とされ、ウォートンが精通していたヨーロッパではない地域の旅行記という意味でも大変ユニークな*In Morocco*という作品の特徴について考察する。

そもそも旅行記（Travel Writing）という著作は、ハイブリッドなジャンルだとされているのだが、とりわけ、ウォートンの旅行記は、風景、建築、歴史、アート、その旅の中で見かけたり出会った人物や催しなどへの言及を含んだ多彩な散文となっている。

次の引用は、*In Morocco*の序文の冒頭部分である。ウォートンのこの時期の「旅行」についての考えと、この旅行記全体のトーンや語り口、視点について、よく分かる部分であるため、大変長い部分ではあるが原文で引用する。

Having begun my book with the statement that Morocco still lacks a guide-book, I should have wished to take a first step toward remedying that deficiency.

But the conditions in which I travelled, though full of unexpected and picturesque opportunities, were not suited to leisurely study of the places visited. The time was limited by the approach of the rainy season, which puts an end to motoring over the treacherous trails of the Spanish zone. In 1918, owing to the watchfulness of German submarines in the Straits and along the northwest coast of Africa, the trip by sea from Marseilles to Casablanca, ordinarily so easy, was not to be made without much discomfort and loss of time. Once on board the steamer, passengers were often kept in port (without leave to land) for six or eight days; therefore for any one bound by a time-limit, as most war-workers were, it was necessary to travel across country, and to be back at Tangier before the November rains.

This left me only one month in which to visit Morocco from the Mediterranean to the High Atlas, and from the Atlantic to Fez, and even had there been a Djinn's carpet to carry me, the multiplicity of impressions received would have made precise observation difficult.

The next best thing to a Djinn's carpet, a military motor, was at my disposal every morning; but war conditions imposed restrictions, and the wish to use the minimum of petrol often stood in the way of the second visit which alone makes it possible to carry away a definite and detailed impression.

These drawbacks were more than offset by the advantage of making my quick trip at a moment unique in the history of the country; the brief moment of transition between its virtually complete subjection to European authority, and the fast approaching hour when it is thrown open to all the banalities and promiscuities of modern travel.

Morocco is too curious, too beautiful, too rich

in landscape and architecture, and above all too much of a novelty, not to attract one of the main streams of spring travel as soon as Mediterranean passenger traffic is resumed. Now that the war is over, only a few months' work on roads and railways divide it from the great torrent of "tourism"; and once that deluge is let loose, no eye will ever again see Moulay Idriss and Fez and Marrakech as I saw them.

In spite of the incessant efforts of the present French administration to preserve the old monuments of Morocco from injury, and her native arts and industries from the corruption of European bad taste, the impression of mystery and remoteness which the country now produces must inevitably vanish with the approach of the "Circular Ticket." Within a few years far more will be known of the past of Morocco, but that past will be far less visible to the traveller than it is to-day. Excavations will reveal fresh traces of Roman and Phenician occupation; the remote affinities between Copts and Berbers, between Bagdad and Fez, between Byzantine art and the architecture of the Souss, will be explored and elucidated; but, while these successive discoveries are being made, the strange survival of mediæval life, of a life contemporary with the crusaders, with Saladin, even with the great days of the Caliphate of Bagdad, which now greets the astonished traveller, will gradually disappear, till at last even the mysterious autocthones of the Atlas will have folded their tents and silently stolen away. (*In Morocco*, Preface vii-x)

引用の下線は全て引用者による。

序文において、ウォートンはモロッコに関する英語で書かれたガイドブックがないことに触れながら、この旅のきっかけとその歴史的背景について述べている。この引用の下線部を中心に見てみると、第2パラグラフでは、この1917年のモロッコの旅の条件の厳しさや困難さが語られ、第一次大戦の様子について言及している。戦時下、戦後における旅行に強いられる制限や、「確かで詳細な印象が」奪われることについても触れている。第5パラグラフ以降では、2重の下線部の「現代の旅行の陳腐さとごちゃ混ぜ」、「周遊券（による旅行）」、やがて訪れる大勢の旅行者を「流れ（"stream"）」,「急流（"torrents"）」,「洪水（"deluge"）」と表現することにより、「ツーリズム（大勢でのツアー（"tourism"））と化してしまった旅を皮肉交じりに表現している。近い将来に多くの旅行者が訪れるようになると、自分が見ているモロッコの風土やよさが失われていくことへの懸念を述べている。ウォートンは自分のモロッコ訪問が、統監（resident general of French Morocco）である General Hubert Lyautey（フバート・リヨテ）からの招待という大変恵まれた旅であることを認めつつも、一般の旅行者たちと自分は違うのだ、という特権意識が明らかに読み取れる。

次に、*In Morocco* という作品のスタイルを確認しておきたい。この作品は、具体的な旅の日時や旅程を記さずに、訪れた場所ごとの描写とエピソードによって構成されておりエッセイ調の読みものとなっている。旅はタンジェというジブラルタル海峡に面した国際都市から始まり、ラバト、フェス、マラケシュなどの都市や観光スポットについて順に書かれている。知識の豊富なウォートンが、（英語の文献は少なかったという事情もあり）フランス語の文献などから得られた歴史や建築などに関する引用や文章を織り込みながら記している。さらに、先ほども述べたように、当時の戦争の影響などといった時勢に関するコメントを織り込みながら書かれている。ウォートンのあらゆる文章に共通する特徴ではあるが、それまでの文学、歴史、政治、その他の読書と旅行の経験の積み重ねによる文章となっている。

4. *In Morocco*：異国を描くこと、オリエンタリズムと西洋女性から見たフェミニズム的視点

この本の初版には何枚かの写真が掲載されているとはいえ、当時は写真を含めると本の価格が高くなってしまうということがあった。そのため、現代のガイドブックとは異なり、写真をそれほど多く載せられないという事情があった。したがって、写真や印刷の技術が高まるまでの旅行記では、風景や建築、人々の服装や営みを言葉や文章で描写する部分が多く見られる。ウォートンによる旅行記もその例から外れていない。大都市への道すがら、風景が変わらない「単調さ」(9) や、「何の特徴もない荒野」(12) などと描写されている一方で、旅で立ち寄る都市や街の光景は、人々の色とりどりの衣装の色合いや、迷宮やバザールの活気が生き生きと鮮やかに描かれている。

フランス人でモロッコ駐在の統監の VIP 客として迎えられ、恵まれた旅行者であったウォートンの視点は、

常にフランス寄りのものであり、フランス贔屓とも言えるコメントが散在している。また、モロッコやその他のアフリカ、中東などの人々に対する眼差しは、ヨーロッパを中心とした優越的な立場からのものであり、「オリエンタル」という言葉も使いながら、オリエンタリズム的、コロニアル、コロニアリズム的（植民地主義的な）な表現が続く。“nigro” や “blacks, big friendly creatures”、“house slaves” といった言葉が点在しており、また、モロッコの街では、貧しい人々、ユダヤ人などについても言及される。

一方で、部外者という視点から、モロッコの制度に対する鋭い考察に満ちているという側面も持つ。次の箇所は、第８章「モロッコの建築に関する覚書」の中の建築に関する部分である。

> The whole of civilian Moslem architecture from Persia to Morocco is based on four unchanging conditions: a hot climate, slavery, polygamy and the segregation of women. The private house in Mahometan countries is in fact a fortress, a convent and a temple: a temple of which the god（as in all ancient religions）frequently descends to visit his cloistered votaresses. For where slavery and polygamy exist every house-master is necessarily a god, and the house he inhabits a shrine built about his divinity.（*In Morocco* 266）

モロッコの建築の特徴を単調さ（155）と述べ、モスクなどの建築物は、同じ図形（構成要素）が繰り返されると説明している。この同じ図形が繰り返される模様は、イスラムアートの特徴であり、一定の評価があるが、ヨーロッパの文化やアートに親しむウォートンの目には「単調」と映ったのであろう。

次に、モロッコのイスラム建築と女性ジェンダーの関わりに注目したい。「ペルシャからモロッコの一般人のイスラム教建築は４つの変わらない条件に基づいている。暑い気候、奴隷制、一夫多妻制、そして女性の隔離である。イスラムの国々の個人住宅（民家）は、実のところ要塞（とりで）であり、修道院であり寺院である。…奴隷制と一夫多妻制が存在する場所では、全ての家の主人が必然的に神であり、彼の住む家は彼の神聖さを取り巻いて作られた神殿なのだ」（266）

ウォートンは、この著書の中で、バザールなどのパブリックな街の様子と共に、ハーレムなどのプライベートなスペースに注目しながら、様々な階級の女性について、その衣装や生活習慣（女性がバザールや外を出歩くことの制限や制約）について書いている（51）。第５章は「ハーレムと儀式」に関するものであり、次に挙げる引用部分では、主に女性に対する言及が続く。

> The Caïd is a great man. He and his famous elder brother, holding the southern marches of Morocco against alien enemies and internal rebellion, played a preponderant part in the defence of the French colonies in North Africa during the long struggle of the war. Enlightened, cultivated, a friend of the arts, a scholar and diplomatist, he seems, unlike many Orientals, to have selected the best in assimilating European influences. Yet when I looked at the tiny creature watching him with those anxious joyless eyes I felt once more the abyss that slavery and the seraglio put between the most Europeanized Mahometan and the western conception of life. The Caïd's little black slaves are well-known in Morocco, and behind the sad child leaning in the archway stood all the shadowy evils of the social system that hangs like a millstone about the neck of Islam.
>
> Presently a handsome tattered negress came across the garden to invite me to the harem. Captain de S. and his wife, who had accompanied me, were old friends of the Chief's, and it was owing to this that the jealously-guarded doors of the women's quarters were opened to Mme de S. and myself.（*In Morocco* 201）

最後の下線部で語られるように、ウォートンは通常であれば入ることができない場所である「女性の区画の用心深く守られたドア」（201）の向こうに通される機会を得て、羊を捧げる神聖な宗教的儀式に同席することができた。海賊や、街に溢れる身分の低い人々、スルタンなどの身分の高い男性たちについて、モロッコの制度や社会について率直に鋭く書く一方で、女性に対する見方は、当時の西洋女性という立場からモロッコのイスラム女性たちの自由のなさについて注目しながらフェミニズト的な視点から書いていることがわかる。

5. ウォートンの旅：ノンフィクションからフィクションへ

本論の元となったウォートンに関するシンポジウムのテーマをノンフィクションと決めた際に、私がウォートンの旅行記、旅（移動）をテーマに選んだのは、アメリカ文学における空間と移動というテーマに興味を持ち続けているという理由もあった。

ウォートンの小説作品の中で、主人公たちが移動するというテーマや場面設定が多いということや、印象的な旅の場面を描いていると考えていたからである。例えば、*The House of Mirth*（『歓楽の家』1905）の冒頭は、ニューヨークのグランドセントラル駅でヒロイン Lily Bart を見つける語り手 Laurence Selden の視点から始まる。また、Lily は上流階級の人々の移動に伴って、電車を使って東部の社交場を行き来する。また、*The Reef*（『暗礁（岩礁）』1912）という作品はドーバー海峡の桟橋の場面から始まり、パリを舞台にした場面などが描かれます。*The Summer*（『夏』1917）や *Ethan Frome*（『イーサン・フロム』1911）など、ニューイングランドの田舎を舞台にした作品においても、鉄道による移動が物語の展開に重要となっている。また、*The Age of Innocence* や *The Custom of the Country* など上流社会を描いた作品においてもアメリカとヨーロッパの間の移動や距離的、かつ、精神的（価値観の）隔たりが、大きなテーマとなっている。

旅を続けたウォートンの自伝 *A Backward Glance*（『顧みて』1934）の中に、旅についての言及を多く読み取れることは言うまでもないが、そのタイトルの元ともなっているエピグラフ（題辞）が、Walt Whitman の "A backward glance o'er travell'd roads."（「旅してきた道を顧みて」）という一文で始まることは大変興味深い。ウォートンにとって、旅と旅程（道）というテーマがいかに重要性が分かるだろう。

人生が旅に準えられることは一般的なことであり、珍しいことではないとは言え、ウォートンの自伝には、第5章に "Friendships and Travels"（90–111）という章があり、そこでは「友人と旅」について言及している。

この章では、死後出版された日記の1888年の地中海クルーズについてもその感動とともに詳しく書かれている（the Vanadis はヨットの名前）。それに対し、晩年の旅である *In Morocco* についての自伝内での言及は覚え書き程度のもので、1ページにも満たない（*A Backward Glance* 357–58）。

ウォートンにとっての旅とは、精神的に必要なものであると当時に、結婚生活からの逃避手段でもあった。一緒に旅をする Henry James らの仲間との関わりの場でもあったが、友人との関わりという以上に、ウォートンが旅において重要視していたのは、旅に持参した大量の書物であった。文学作品に限らず、様々なジャンルの文献を読むことと旅は切っても切り離せない繋がりを持っていた。それまでに読んだ小説や多方面、多様な分野に渡る文献の内容を、旅行途中に思い起こし、再び味わいながら、実際に旅行記の中にも盛り込み、旅行記の中に書きとめていくというのがウォートンの旅行記の手法である。また、ウォートンの散文、自伝、ノンフィクション、小説には、卓越した風景や人物描写が共通点として見られ、ノンフィクション作品では、フィクション性という文章の特徴や描写の要素も色濃い。ウォートンのノンフィクションは、小説作品への習作となっていることは間違いないだろう。

さらに、ウォートンのフィクションであれノンフィクションであれ—旅行にまつわるものに限らず、建築や庭、マナーに関するものであっても—いずれの作品を読む際に注目しておかなければならない点がある。それは、ウォートンがヨーロッパの国々について、イタリアやフランスなどの建築や第一次大戦について描いている際にも、根底には常にアメリカへの意識があるということである。常に、背後にちらつくアメリカが彼女の永遠のテーマ the silent subject なのである。ウォートンにとって、外国について描くことは、皮肉にもアメリカという故国を見つめ直すこととなり、「アメリカがヨーロッパに対して抱くロマンス」(Schriver Introduction xl)、ウォートンがヨーロッパや過去に対して抱くロマンスやノスタルジーが自ずと浮かび上がってしまうということである。

フランスとモロッコを題材とした *A Motor-Flight through France* と *In Morocco* という作品も、表向きアメリカのことを題材にはしていないが、ウォートンの根底にあるアメリカへの意識や自分のルーツへの回顧というものを常に孕んだ作品であると言える。

近々、これら全てのジャンルを網羅したオックスフォード大学出版によりウォートンの全集が編纂されるというタイミングで、シンポジウムのパネラーが皆ノンフィクションを読んでみようと考えが一致したということも、偶然ではないだろう。

このようにウォートンのフィクションとノンフィクションを分け隔てなく、関連付けて読むことで、ウォートン研究、ウォートンのテクストの読みはさらに深まると考えられる。

これまで編まれることのなかったフィクション、ノン

フィクションを網羅する全集の編纂により、正式なバージョンが決定することによるウォートン研究全体のこれからの進展に期待し、これをきっかけとして、ノンフィクション作品をさらに読み進めていくことで、フィクション作品の深い読解に繋げていきたいと考えている。

＊本稿は、2018 年 4 月 21 日に日本アメリカ文学会中部支部大会シンポジウム「イーディス・ウォートンの文化的視座とノンフィクション」（於：愛知大学名古屋キャンパス）において、口頭発表したものに加筆修正を行なったものである。

Works Cited and Consulted

Harden, Edgar F. *An Edith Wharton Chronology*. Palgrave Macmillan, 2005

Schriver, Mary Suzanne. "Convention in the Fiction of Edith Wharton." *Studies in American Fiction* 11.2 (1983) : 189-201.

—. "Edith Wharton and the Dog-Eared Travel Book." In Katherine Joslin and Alan Price, eds. *Wretched Exotic: Essays on Edith Wharton in Europe*. New York: Peter Lang, 1993.

— . "Edith Wharton and the French Critics, 1906-1937." *American Literary Realism, 1870-1910* 13 (1980) : 61-68.

---. "Edith Wharton and Travel Writing as Self-Discovery." *American Literature* 59.2 (1987) : 257-67.

Singley, Carol J., ed. *A Historical Guide to Edith Wharton*. Oxford UP, 2003.

Tuttleton, James W, Kristin O. Lauer, and Margaret P. Murray. *Edith Wharton: The Contemporary Reviews*. Cambridge, England: Cambridge UP, 1992.

Wharton, Edith. *A Backward Glance: An Autobiography*. 1934. New York: Touchstone, 1998.

---. *The Age of Innocence*. 1920. New York: Scribner, 1998.

---. *The Custom of The Country*. 1913. New York: Scribner, *1997*.

---. *Ethan Frome*. 1911. New York: Penguin, 2005.

---. *The House of Mirth*. 1905. New York: Scribner, 1995.

---. *A Motor-Flight Through France*. 1908. Northern Illinois UP, 1991.

---. *In Morocco*. New York: Scribner, 1920.

---. *The Reef*. 1912. New York: Scribner, 1996.

---. *Summer*. 1917. New York: Scribner, 1998.

Wright, Sarah Bird. *Edith Wharton A to Z: The Essential Guide to the Life and Work*. New York: Facts on File, 1998.

---. *Edith Wharton's Travel Writing: The Making of a Connoisseur*. New York: St. Martin's, 1997.

---. "Refracting the Odyssey: Edith Wharton's Travel Writing as the Cultural Capital of Her Fiction." *Edith Wharton Review* 13.1 (1996) : 23-30.

Wright, Sarah Bird, and Shari Benstock. *Edith Wharton Abroad: Selected Travel Writings, 1888-1920*. New York: St. Martin's, 1995.

【表 1】

作品名（実際の旅行を元にしたもの）	
The Cruise of the Vanadis (1992)	1888 年（26 歳）の旅行についての日記（1991 年に発見 , 1992 年出版）
Fighting France, from Dunkerque to Belfort (1915)	
A Motor-Flight Through France (1908)	1906 年 5 月 , 1907 年 3 月（ヘンリー・ジェイムズと）の 3 度の旅行が元になっている。1906, 1907, 1908 年に *Atlantic Monthly* に掲載。
In Morocco (1920)	1917 年にモロッコを訪れる。
（トラベルスケッチ、エッセイ）	
The Decoration of Houses (1897)	インテリアに関する共著。EW 初期の出版物。
Italian Villas and Their Gardens (1904)	
Italian Backgrounds (1905)	
French Ways and Their Meaning (1919)	女性の問題や教育にも触れている。

Edith Wharton's Travel Writing *In Morocco* : Eyes of Orientalism and Feminism

Faculty of Liberal Arts, Department of English as an International Language
Yoko MIZUGUCHI

Abstract

Edith Wharton, who often traveled Europe from five to twenty-one years old and stayed abroad for eight years, has a thorough knowledge about European art, architecture and manners. She published many nonfiction books and articles. After she moved to France during years 1907-1910, she had a broad and insightful perspective on her home country, the United States of America. Her masterpieces such as *The Age of Innocence* (1920) and *The Custom of the Country* (1913) describe the theme of differences between Europe and America. Among her works about European cultures in France and Italy, *In Morocco* (1920) can be read as a travel guidebook dealing with a lot of important themes and issues. This Oriental country is her unusual destination. Wharton's travel writings include various discourse not only on art and architecture but also on culture, ways of living and manners. This paper examines the meanings of continuous Wharton's moving and travel in her travel writings. I also figure out we can see fictional descriptions in her nonfiction books such as her autobiography and travel writings.

Keywords: Edith Wharton, *In Morocco*, travel writing, moving and travel, Orientalism, Feminism